

福島県富岡町から名古屋市へ避難

主婦 鈴木ユカリさん(39)

「ム機のように電氣を使わない点もよかった。」

十日後に名古屋の夫の実家に到着し、最初に困ったのはアトピーやぜんそくがある長男の薬で

伝える
何が必要か



夫(四)と長女(二)、長男(六)、次男(六)で名古屋市天白区の避難者用借り上げ住宅に住んでいます。

福島第一原発から十キロの自宅に長男と二人でいた時、地震が起きました。東京電力の協力会社の作業員で原発内で働いていた夫は二時間ほどで帰宅。長女を小学校、次男を保育所に迎えに行きました。

長男は地震の際、ストープにかけていたやかんの熱湯を浴び、落下してきたテレビが足に直撃。けがはなかったけど、余

役立った子どもの落書き帳

震が怖くて自宅にとどまる気にはなれません。ワゴン車の中で家族五人で羽毛布団にくるまって夜を明かしました。

翌朝、防災無線で原発事故を知り、車で西隣の川内村の中学校へ。冬の体育館は本当に寒いけど、被災者が殺到して毛布が足りない。私たちは車に積んできた布団で寒さをしのぎました。

避難の際、コンビニで目についた食料を買い込んだけど、家族五人で食べるに足りなくなりました。原発事故で周辺は飛行禁止区域になり、自衛隊ヘリの輸送も途絶えて食料が不足。子どもがずっと「おなかがすいた」と言っていました。もっと非常食を用意しておけばよかった。

役立ったのが、何となく持ってきた落書き帳や折り紙。子どもが退屈しないので遊んでくれた。ゲ

「最近、周囲の人から『落ち着いた?』と言われることが、正直つらい。夫は建築関連の会社に転職し経済的には安定しましたが、長男が寝る前に突然泣きだしたり、心に残る傷が不安。長女は福島で習っていたピアノを、長男も水泳をやめた。原発事故で周辺は飛行禁止区域になり、自衛隊ヘリの輸送も途絶えて食料が不足。子どもがずっと「おなかがすいた」と言っていました。もっと非常食を用意しておけばよかった。」

数カ月一度、富岡町の自宅に防護服を着て一時帰宅し、楽器や水着、学習机を持ち出していきます。子どもが思い出の品を手にして、いつ終わるか分からない避難生活を

受け止め、少しずつ回復してくればと願っています。

(聞き手・相坂 稜)

(聞き手・相坂 稜)